林いさお通信

Together !! 共に!!

ブログ：http://pikaichino.exblog.jp/　Tel　049-259-2228

討議資料Ｎｏ．132　災害ボランティア２８年５月９日号　林いさお後援会

益城町（４月２９日）

熊本へ災害ボランティア派遣

４月14日発生した熊本地震。尊い命が奪われ、いまだ余震が続く中、避難所生活を余儀なくされている方も大勢いらっしゃいます。心からお見舞い申し上げます。

三芳町では、職員のボランティア休暇を活用し、４月23日～27日、４月28日～５月２日まで２班に分けて５名の職員をボランティアとして派遣。私も第２班に参加しました。以下が、その活動報告です。

４月28日、熊本市内の宿泊施設がとれず、飛行機で福岡に。博多に宿泊。

４月29日、朝一番の新幹線で熊本に向かい、熊本からレンタカーで益城町に。約40分。益城町は、家屋や塀の倒壊がひどく、地震の被害の甚大さと恐ろしさをあらためて感じました。午前中は、ボランティアセンターで活動（ｐ２へ）

（ｐ３から）には、これまで４つの心の変化があったということです。最初は、生きてて良かったという喜び、次に、何で自分達だけがという怒り、そして、あきらめ、さらに、無気力。そうした避難者の心に寄り添い、理解し接して欲しいとのことでした。避難所の体育館で生活を余儀なくされている姿を拝見すると心が痛みました。南阿蘇村の職員の方からは、災害発生時等の課題等も聞かせていただきました。

4/30 朝日

被災地ボランティア 三芳町職員奮闘

熊本県の被災地でボランティア活動にあたった三芳町の職員が戻り、28日に町役場で活動の報告会を開き、地震直後の生々しい様子を伝えた。また同日、林伊佐雄町長(58)と職員2人がボランティア第2陣として熊本に入った。

第1陣は政策推進室の丸野寿子主事(30)と道路交通課の木村竜彦主事(30)。林町長の発案で全職員に募った災害ボランティアに応じた。ボランティア休暇を取って23～27日に被災地入り。交通費は町職員からカンパがあったという。熊本市で避難者への水や食糧の配布を手伝うなどした後、益城町へ。「家屋が軒並み倒壊していて驚くしかった」と木村主事。被災住宅の後片付けや清掃をしたが、水がないため拭き掃除が大変だったという。

林町長らは28日～5月2日の日程で熊本入り。林町長は出発前、首都直下地震を念頭に「いかに防災の構えを高めていくか、ボランティア活動を通じて情報を得たい」と話した。町によると、この間、職務代理者は置かないという。

一方、県は5月1日から、全国知事会を通じた支援要請を受け、熊本県御船町に県と狭山市の職員計4人を派遣する。建物被害の応急調査を主に行う。（岩佐洋）

熊本県益城町の被災住宅で後片付けや清掃などを行う木村主事＝三芳町提供

熊本地震 第1陣報告会／第2陣は町長も

朝日新聞（４月３０日）

５月２日、フライト時間の関係でボランティア活動はできず、熊本市内の熊本城、熊本大神宮、熊本市花畑広場のボランティアセンターなどを視察し、帰途につきました。今後支援の輪を広げ、三芳町の防災にも活かしていきたいと思います。※

益城町の被災者の方からメールが届きました。紹介させていただきます。『ボランティアありがとうございます。益城町が、また元気な町になりますようどうぞ応援して下さい。若い人達が何かをやろうという気持ちは、きっと未来につながると思います。もちろん、熟年の力にも感謝です。』

①益城町倒壊家屋

②益城センターでオリエンテーション

③倒壊した塀の撤去活動

④南阿蘇村ボランティアセンターで

している知人が、町内の被災状況、避難所、災害対策本部等を案内してくれました。午後からは、益城町災害ボランティアセンターと連携している日本財団、ボランティアグループの指示に従って活動の開始。障害者世帯、引っ越しされる世帯の家具の搬出、倒壊したブロック塀の撤去などを行いました。夕方、熊本市の城東小学校の避難所を訪問し、運営にあたっている原田氏から、熊本市の避難所、被災された市町村の状況などについて説明を受ける。行政自身も被災しており、熊本県や他県、ボランティア団体と連携を図りながら被災者支援や復旧作業を行っており、そのご苦労は想像を超えるものがあります。

4月30日、益城町災害ボランティアセンターで受付をし、家屋の解体作業の手伝い、瓦やブロックなど災害ゴミの集積所への運搬を行う。連休ということもあってセンターには多くのボランティアの皆さんが駆けつけていました。センターは企業のグランド内に設置され、ボランティアは、受付→オリエンテーション→被災者のニーズとのマッチングとグループピング→資材の貸出・送迎→救援活動→活動報告という流れで行われます。

被災された方からは、ボランティアセンターの速やかな開設にあたっては、行政や社会福祉協議会ではノウハウや経験不足から限界があるのではないかとの意見をいただきました。行政がそうしたノウハウを習得するか、緊急支援を行う組織や団体と日頃から連携を図り、震災直後から入っていただく必要性も感じました。

災害ゴミの集積所は、廃校となった小学校の校庭を使用。今後増えていくであろう災害ゴミの集積所問題なども気になるところです。また、倒壊した家屋等の解体、運搬、清掃、メンタルヘルスケア、さらには被災した農家の作業の遅延（スイカの収穫、田んぼの苗植え等）に対する農業支援など様々な支援が必要となります。

5月1日、南阿蘇村で活動。熊本駅から車で約1時間45分。益城町と同様に社会福祉協議会の災害ボランティアセンターで受付、オリエンテーション後、マッチングによって活動内容を選択し現地に。避難所になっている南阿蘇村長陽体育館で物資の仕分け、配布、受付、清掃等の作業を行いました。地震発生当時は700人ほどの避難者がいましたが、その後、自宅に戻られたり、県外、県内他市町村に移られ、現在は250人ほどが避難所生活を送っています。南阿蘇村には他にも2カ所の避難所があり、それぞれ200人ほどが生活しているとのこと。

ボランティアセンターの担当者からは避難所の皆さん（p4へ）

⑤南阿蘇村避難所

⑥阿蘇大橋崩落現場

⑦熊本城

⑧避難所内支援のメッセージ